

大英博物館所蔵「伊吹童子」絵巻について

小澤 弘

はじめに

室町期から江戸前期にかけて制作された奈良絵系の絵巻が多数現存する。そのなかでも、特に豪華な仕様の、金銀砂子蒔きや金泥引きの装飾を加えた極彩色の画に、金泥絵の装飾料紙下絵をもった詞書という、絵巻物の存在は、異彩を放つものである。

すでに私は、「役の行者絵巻」の諸本について、それらの存在に強い関心を持っていたが、大英博物館での数年にわたる日本絵画の調査の折りに、これらの絵巻群の一本で、御伽草子絵巻の「酒吞童子」の一つ「伊吹童子」絵巻の存在に興味を惹かれていた。一九九五年と本年（一九九七年九月）の大英博物館の日本絵画の調査時に、精査できたので、ここにその翻刻を試みた。ただし、この大英博物館所蔵本「伊吹童子」絵巻は、すでに画の写真版とその概要が榊原悟⁽²⁾によって『秘蔵日本美術大観』2で紹介されている。また一九八九年に、沢井耐三による翻刻・校注⁽³⁾がなされている。しかし、前者は、その概略のみであり、後者の翻刻は、翻案を兼ねた『新日本古典文学大系』の編集方針で、残念ながら原の体裁をとっていない。

そこで本稿では、原本通りの改行や翻字を提示し、なお沢井耐三の翻案を兼ねた翻刻⁽⁴⁾もあるが、著者の翻案を試みた。したがって翻案の部分は沢井の『新日本古典文学大系』翻刻とほぼ同様の結果が出ていることになる（一部翻刻が違い、また一部は翻案も異なる）。

一、「伊吹童子」絵巻と伊吹山系「酒吞童子」絵巻

松本隆信が「在外奈良絵本善本略解題」のなかで、大英博物館の所蔵品（以下、大英博本と略称する）として「ゑんの行者」絵巻とともに「伊吹童子」絵巻を挙げており、要を得た解題⁽⁵⁾であり、次に掲げる。

「伊吹童子」〔寛文〕元禄〕写 絵巻 三軸

紙高三二センチ。画図全十五図。錯簡あり。伊吹の三郎と大野木殿の姫との間に生まれた酒吞童子が比叡の山中に捨てられ、やがて乱行の故に神神に追われて丹波の大江山に棲みつくことを述べた物語。本作には筋に大きな違いのある、東洋大学蔵絵巻「伊吹童子」（後半欠、岩波文庫続お伽草子所収）と赤木文庫旧蔵絵巻「酒典童子」（室町時代物語大成第二所収）の二本が知られている。本書は東洋大学蔵本に近いが、詞章はもとより筋の運びにも相違ある異本である。

松本隆信は、このほか在外における奈良絵本として、アイルランドのダブリンにあるチェスター・ビーティ図書館所蔵品のなかに、「大江山絵巻」（寛文、写本、三軸）があり、詞書が伊吹山系の大東急記念文庫所蔵奈良絵本「しゅてん童子」（『室町時代物語大成』第二所収）と同文の作品であることを指摘している。⁽⁶⁾ またニューヨーク・パブリック図書館のスペンサー・コレクションにも、詞書の冒頭が大東急記念文庫本と同じであるが、内容は大江山系である酒吞童子の奈良絵本「酒典童子」絵巻（寛文、写本、三軸）を挙げ、チェスター・ビーティ本とは異なる種類の本であるとしている。なおスペンサー・コレクションに、大形の絵巻「酒吞童子」三軸があり、岩瀬文庫蔵「酒顛童子」（『室町時代物語大成』第二所収）と詞書や画が同一であると、松本は言う。⁽⁷⁾

また御伽草子絵巻については、奥平英雄により『御伽草子絵巻⁽⁸⁾』が編じられ、諸本についての考察があり、その中で「酒吞童子」絵巻については、伊吹山系の代表としてサントリー美術館本が、大江山系として逸翁美術館本が、それぞれ榊原悟⁽⁹⁾によって紹介されている。

さて、伊吹山系の伊吹童子あるいは酒吞童子の絵巻は、全体としてどのような作品があり、どのような異同が見られるかについては、松本隆信の比較研究「室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』所収、一九八二年、三省堂)に詳しい。そこには「伊吹童子」という項目と、「酒巖童子(伊吹山系 別名伊吹山絵詞)」と二つの項目に所収されている。松本によれば、「伊吹童子」の物語は、その物語の筋の大きな違いによる分類でA・Bと二つに分され、そのA系の中がさらに詞章に著しい差異が認められる三つの小分類となり、大英博本はA(三)に相当する作品であるとしている。

ここで、先述のデータに加えて、松本の「在外奈良絵本善本解題」「室町時代物語類現存本簡明目録」、徳江元正「国内の主なコレクションめぐり」(『御伽草子の世界』所収)、榊原の解題や論文、それに『国書総目録』など、管見に入るところの「伊吹童子」絵巻と伊吹山系「酒吞童子」絵巻の作品を挙げてみよう。【活】は翻刻活字本や論文を示し、《A一》は、松本隆信の分類を示す)

「伊吹童子」絵巻群

1 東洋大学付属図書館所蔵(島津久基旧蔵)「伊吹童子」絵巻 三卷 《A一》

【活】「伊吹童子」(島津久基編・市古貞次校訂『続お伽草子』岩波文庫)

2 国会図書館所蔵「伊吹童子」絵巻 一卷(上巻欠) 《A二》

3 大英博物館所蔵「伊吹童子」絵巻 三卷 《A三》

【活】沢井耐三校注「伊吹童子」(『新日本古典文学大系—室町物語(上)—』岩波書店)

4 赤木文庫(横山重)旧蔵「酒典童子」絵巻 八卷(奈良絵本の絵巻改装本) 《B》

【活】「酒典童子」(横山重編『室町時代物語』四、古典文庫)「伊吹山(大江山以前)酒典童子(仮題)」(横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第二、絵巻番号45、角川書店)

5 徳江元正所蔵 絵巻零本 一卷

大江山系「酒呑童子」絵巻群

6 サントリー美術館所蔵 狩野元信筆(奥書)「酒伝童子」絵巻 三卷

【活】論文 榊原悟「サントリー美術館本『酒伝童子絵巻』をめぐって(上・下)」(『國華』一〇七六・一〇七七所収)

7 島原松平家所蔵 狩野元信筆(詞書のみ) 絵巻 三卷 《一》(佐竹昭広『酒呑童子異聞』平凡社)

8 東京国立博物館所蔵 伝狩野孝信筆「大江山絵詞」 絵巻 三卷 《一》

9 宮内庁書陵部所蔵 絵巻 三卷 《一》

10 ニューヨーク・パブリック図書館所蔵スペンサー・コレクション 「酒呑童子」絵巻 三卷 《一》(岩瀬文庫本と同系本。松本注記)

11 チェスター・ビーティ図書館所蔵「大江山(伊吹山系)」 絵巻 三卷 (大東急本と詞章が同一。松本注記)

12 天理図書館所蔵 絵巻 三卷 《一八》

13 曼殊院所蔵「酒呑童子」 絵巻 三卷 《三》(狩野派。榊原注記)

14 所蔵先不詳 狩野探幽筆「酒顛童子」 絵巻 三卷 (榊原解説)

15 所蔵先不詳 土佐光起筆 絵巻 三卷 (榊原解説)

16 藤田美術館所蔵 元禄五年 菱川師宣筆「大江山鬼退治絵巻」 三卷 (伊吹山系。榊原解説)

17 岩瀬文庫所蔵「酒顛童子」 絵巻 五卷 《一》

【活】(『室町時代物語』四、古典文庫)「(伊吹山)酒顛童子」(『室町時代物語大成』第二、絵巻番号46)

18 天理図書館所蔵「大江山(伊吹山系)」 絵巻 五卷 《一イ》

- 19 根津美術館所蔵 絵巻（残欠本） 一巻 《二イ》
- 20 中野莊次所蔵 絵巻 五巻 《二ロ》
- 21 中京大学付属図書館所蔵 「酒天童子（伊吹山系）」絵巻 五巻（徳江目録）
- 22 舞鶴図書館西系井文庫所蔵（絵巻三軸本の）写本 一冊 《二ニ》
- 23 舞鶴図書館西系井文庫所蔵 正徳四年（絵巻三軸本の）写本 一冊 《一》
- 24 大東急記念文庫所蔵「しゅてん童子」奈良絵本 三冊 《二イ》
- 【活】 《室町時代物語》四、古典文庫）「（伊吹山）しゅてん童子」《室町時代物語大成》第二、絵巻番号47）
- 25 龍門文庫所蔵「しゅてんどうじ」（伊吹山系）奈良絵本（横） 三冊 《二イ》
- 26 九州大学国文学研究室所蔵 奈良絵本 三冊
- 27 舞鶴図書館西系井文庫所蔵 文政六年写本「丹州大江山」 一冊
- 28 東京大学文学部国文学研究室所蔵 「伊吹ものかたり」写本一冊 《一》
- 29 龍谷大学所蔵 「伊吹絵詞」写本 一冊 《二イ》
- 30 松井文庫所蔵 「酒顛童子物語」写本 冊子 《二イ》
- 31 静嘉堂文庫所蔵 写本 一冊 《二イ》
- 32 山岸徳平所蔵（静嘉堂文庫所蔵本の）影写本 一冊 《二イ》

こうして一覧してみると、いわゆる「酒吞童子」（別に、酒顛童子・酒顛童子・酒典童子・酒天童子・しゅてん童子などの表記がある）の物語は、①大酒呑みの伊吹の弥三郎が大野木殿の娘と婚姻し、舅によって殺された弥三郎の息子が父に似た性格のため谷底へ放逐された稚児が、鬼神を眷属に従え、酒を好み鳥獣の生肉を食らうことから「酒吞童子」と命名され、やがて神仙に逐われて丹波の大江山へ逃げ、鬼が城を形成し、美女を侍らせ栄華快樂の生活をするという筋立ての、通称「伊吹童子」のものと、②源頼光と四天王が鬼神の酒吞童子を退治する物語のものに、まず大別される。①は酒吞童

子の親伊吹の弥三郎とその子酒吞童子の話と見れば、大江山の前章譚ともいえよう。それに対して②は、一般的によく知られた酒吞童子の乱行と頼光たちの鬼退治の話が主体である。この②の酒吞童子の棲処を、(a)近江国伊吹山の奥の千丈が嶽とするものと、(b)丹波国大江山とするものがある。これを伊吹山系「酒吞童子」と大江山系「酒吞童子」とに分類する方法が、従来の御伽草子研究者たちによってされてきている。この伊吹山系は、おそらく伊吹童子系の源泉となる説話との混交によって成立してきたものであろう。

さて、こうした三つの系統の説話による「酒吞童子」絵巻が現存するが、前掲したリストには①「伊吹童子」系と、伊吹山系「酒吞童子」(②—a)のみを取り上げ、大江山系「酒吞童子」(②—b)は本稿とは直接関連がないため割愛した。

こうしてリストにしてみると、「伊吹童子」系の絵巻は、本数が少なく、また完本と思われるものは東洋大学本(島津旧蔵本)と本稿の大英博本のみであり、しかもこの二本の間には、粗筋は同じでありながら詞章の表現には大きな相違が見られる。赤木文庫旧蔵本は、元来が奈良絵本の絵巻改装本なので、絵巻スタイルの作品からははずれるが、奈良絵本と御伽草子絵巻との関係を考慮すると、リストには入れておくべき作品である。

ついでながら、伊吹山系「酒吞童子」の絵巻は、絵師の狩野元信筆や詞書筆者名のある奥書をもつサントリー本を筆頭にする三卷本系の絵巻と、五卷本系の、二種類の絵巻群が存在する。こうした仕立ての違いは、祖本としたテキストの系統の違いとも思われる。

大英博本「伊吹童子」絵巻は、こうした三系統の「酒吞童子」物語の絵巻のなかでも、文芸および絵画史の上で貴重な作品である。

二、ウィリアム・アンダーソンと大英博本「伊吹童子」絵巻

大英博物館所蔵の「伊吹童子」絵巻(紙本彩画、三卷)は、所蔵番号がADD.174/175/176と付されており、絵巻に刻

印された印章銘 (JAPANESE/BRITISH/1881/12/10/271/ MUSEUM) から、一八八一年十二月十日に大英博物館の日本美術部の所蔵品 (その時の収蔵品の二七一番目) となったことがわかる。

しかし、この三巻からなる「伊吹童子」絵巻にふられたラベル番号の順は、精査の結果、上巻が ADD. 176 で、中巻が ADD. 175、下巻が ADD. 174 に相当し、しかも下巻 (ADD. 174) の画と詞の順番に錯簡があり、この巻の一番最初の詞書とそれに続く画は、一番最後の段に相当するのである。このラベルの番号の順序の不具合は、恐らく館蔵品となった時点で本絵巻の内容についてよくわからなかった結果ではないかと想像される。また表具の具合から、すでにこの絵巻が館蔵品となった時点で錯簡があったものと推定するが、そうであれば、本絵巻が一八八一 (明治十四) 年より以前の段階で、何らかの理由で改装されたものと想定され、その時点で錯簡が起こったのではないかと思われる。この絵巻が大英博物館の蔵品となったのは、ウィリアム・アンダーソンによるものである。

さて、大英博物館の日本美術部研究員ティモシー・クラークによる、アンダーソンと日本美術に関する興味深い一文⁽¹⁰⁾があるので、ここに紹介する。

(前略) ウィリアム・アンダーソン (William Andeson, 一八四二―一九〇〇) は、セント・トーマス病院の外科医 (一八八〇年より外科助手、一八九一年より専任外科医) として、あるいは王立学士院 (Royal Academy) の解剖学教授 (一八九一年から) として活躍したが、その間も、芸術と医学、そして (両者の自然な結びつきともいえる) 解剖学に対する興味を持ち続けた。こうしたアンダーソンの経歴にエキゾチックな一幕をつけ加え、その幅を広げさせたのは、東京の海軍軍医学校の校長として日本に滞在した一八七二年から八〇年にかけての七年間である。彼はきわめて短期間のうちに日本語で授業を行なうまでに日本語を習得し、また日本絵画史の詳しい知識も身につけていった。もともとアンダーソンは、医学生として一八六四年にセント・トーマス病院に入る以前、ランベス美術学校で絵を学んだことがあり、後に解剖学を教えた時にも、黒板に描いた図の「大胆ながら正確な輪郭」で生徒たちを驚嘆させたりもした。また、彼が日本で入手した二千二百九十九点にのぼる日本絵画類 (その入手先は知るよしもないが) は、彼が収集にあたって分類学的な完璧さを追求したことや、図解性と優れた技巧を好んだことをうかがわせる。アンダーソンは鑑

定家としてはアーネスト・フェノロサに及ばなかったことは確かだろうが、フェノロサほどの資金や助言者に恵まれていなかったのもまた事実である。

帰国後もアンダーソンは精力的に日本と日本美術に対する興味を追い続けた。彼の日本絵画コレクションは一八八一年に三千ポンドで大英博物館に買い上げられたが、その裏には、大英博物館の英国・中世遺物民族学部部長で自身も日本の絵画、陶器、考古学出土品のコレクターであったオーガスタス・ワラストン・フランクス (Augustus Wollaston Franks) の熱心な助力があった。

当時の収蔵品調査によれば、その数は掛け物九百二十七点、巻物百一点、画帖二十七点、屏風三点、額絵五点、まくり二千二百三十六点となっている。続いて翌年には、ジャパンライブラリーのために、木版画絵本を中心とした日本の絵入り本三百一十一冊が三百六十ポンドで買い上げられた。また、アンダーソンは、同博物館理事会より『大英博物館蔵の日本・中国絵画カタログ』(『A Descriptive and Historical Catalogue of a Collections of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum』)の制作も依頼された。一八八六年に出版された五百四十四ページに及ぶこの目録は、図版の数は少ないものの、画家の紹介と詳細な注解により今日でも有用な文献となっている。同じ年、アンダーソンは、この目録よりもかなり大判で、逸品はあまりないが数多くの図版を収録した『日本の絵画芸術』(『The Pictorial Arts for Japan』 ロンドン、サンプソン・ロー Sampson Low 発行)を出版した。(中略)

一八八九年から九二年にかけて、アンダーソンのコレクションから選んだ作品が大英博物館のホワイト・ルームで展示されたが、具体的にどの作品が展示されたかについては記録が残っていない。アンダーソンは、一八九二年にロンドンの日英協会が設立されると、その理事長に就任し、死去するまでその任をつとめた(下略、傍線は私注)これらのことから、日本でアンダーソンが入手した二千二百九十九点にもおよぶ膨大なコレクションを、一八八一(明治十四)年に大英博物館が買い上げたわけであるが、その中の巻物百一点の、その中にあった三巻が、この「伊吹童子」絵巻であったのである。アンダーソンの日本美術に関する分野が、いかに多岐に渡っていたかが窺える。

三、大英博物館本「伊吹童子」絵巻の特色

大英博本の「伊吹童子」絵巻は、紙本著色の三巻からなる作品で、すでに第一章で述べたように錯簡があり、卷子に付けられた所蔵ラベル番号の順序も、物語の筋立てから見て違っている。法量は、三巻とも、軸長さ三二・二センチ、紙幅が三一・二センチと、ほぼ通常の絵巻のサイズである。長さは、上巻 (ADD. 176) が九二七・五センチ、中巻 (ADD. 175) が八五七・三センチ、下巻 (ADD. 174) が八八八・四センチである。手頃な巻きの仕立てである。題簽はなく、内題もない。また絵師や書家の銘もない。したがって、制作者は特定できないが、土佐派的なニュアンスも残す作風であり、狩野元信筆と奥書のある狩野工房作のサントリー本のように端正ではないが、全体的に破綻のない構成と筆致である。画は、岩絵の具を用いた濃彩画で、金砂子蒔きの源氏雲や金泥引きによる装飾や、墨の輪郭線による括りのある青灰色のすやりが引かれる。画の料紙寸法は、ほぼ縦三一センチ×横五一センチ (四九・五三センチ) で、最終段の絵に相当する下巻の画4の三紙継ぎを除いて、あとは二紙継ぎの画となっている。これは、ちょうど両手で絵巻を繰り広げて見るサイズに相当し、本絵巻が御伽草子の鑑賞として都合のよいように絵師によって構図されたためと思われる。

上巻は詞書五段・画五図、中巻は詞書五段・画五段、下巻が詞書四段・画四図で、計十四段・十四図という構成である。構図では、屋敷の構えと庭の景が転用 (上巻画5・中巻画1) され、また岩屋と周囲の樹木 (松など) の景が転用 (中巻画5・下巻画1)、縁先と紅梅 (一方は紅梅と松による樹型の同様な構図) の構図も類似 (上巻画1・上巻画4) する、といったように、絵巻物によくある類似した構成や構図を用いている。人物も、伊吹の弥三郎などに見るごとく、衣服の文様で同一の人物であることが特定できるようになっており、その場面場面における表情の変化があっても、しかとわかるような仕掛けとなっている (図1・図2)。

樹木は、紅梅・柳・桜花・松・紅葉・楨などが描かれ、草花は桔梗・萩・笹など、その場面に合った季節感を表現しているものと考えられる。鬼神のどことなくユーモラスで恐ろしげな表情 (図3)、牛馬を追い回す酒吞童子の動的表現

などに、見るものがある。動物は、牛・馬・猿・犬・鹿・猪・雉・鴨などが登場し、とくに中巻画2の田舎屋の茅葺き屋根の上には雌雄の鶏が描かれ富貴の象徴を示している。

岩などの輪郭線は太めのゆったりした筆致で、緑青もたっぷりとした使い方である。

下巻画三の紫雲にのって示現する三仏は、金砂子を蒔き散らし図像をシルエット風に表現していて珍しい。また包丁人や鬼神の料理の様子などは、特記すべきであろう。

詞書料紙の装飾金泥下絵は、浜松図（松に波）・武蔵野図（薄や秋草）・八橋図（花菖蒲）・山水図などの画題が金泥線画で描かれており、この下絵も本画の方と草花の筆致が近似しており、同じ絵師の手によるものである。詞書の墨書は、料紙の紙継ぎにかかって書かれている段も多く、紙継ぎされた料紙の上から書かれたものである。これは、他の装飾料紙金泥下絵を持つ十七世紀の御伽草子絵巻によく見られるものである。詞書は、それぞれの段で話の長さが違うため、料紙の紙継ぎも一紙から三紙とそれぞれであり、またそれぞれの長さも不定である。

画中画は、床の間の壁画や襖絵には金泥引き水墨画の「山水図」が描かれ（上巻画1・2・3・4、中巻画1、下巻画4）、おなじく金泥引き水墨画「山水図」の屏風絵（上巻画5・中巻画1）が、また杉戸絵に「白鷺図」（中巻画1）が見られる。この水墨画も手慣れたものである。

さて、「伊吹童子」の成立とその内容については、佐竹昭広『酒吞童子異聞⁽¹¹⁾』に詳しいので触れないが、ここでは東洋大学本（東洋本と以下略称）のとの相違について少し述べておく。

まず、大きな違いは、（一）大野木殿の姫君と伊吹の弥三郎の婚姻譚が、東洋本では誰か知らぬ人が姫君に通い、ただならぬ身となる姫君と、その相手の衣の端におだ巻を針に付けて通し（三輪山伝説と同類）伊吹の弥三郎と知るとい話があるが、この部分が大英博本にはない。（二）大英博本では、大野木殿が七駄の酒を飲まして酔わし刺し殺す話となっているが、東洋本では七つの酒甕に酔い臥してそのまま亡くなったとする話となっている。（三）東洋本は、弥三郎の妻の出産に三十三月かかったという異変誕生譚となっているが、大英博本にはない。（四）東洋本では八岐の大蛇の話が詳しく、またそれに引き続き日本武尊の東征と白鳥伝説の話が詳しく続くが、大英博本では八岐の大蛇の話が少しあって、

あとはないこと。(五) 大英博本では、比叡山で神仏に逐われる酒吞童子の話が詳しいが、東洋本では最澄が杉の大本と化した酒吞童子(図4)の通力を破る歌で終了しているのに対し、大英博本はその後丹波国大江山へ逃れ、美人・鬼神を従え栄華快樂に暮らす酒吞童子まで話が続き終了すること。これは源頼光と四天王の鬼退治への前章譚として完結させる形を大英博本がとっているといえよう。

「伊吹童子」や「酒吞童子」の出生にかかわる異類婚姻の子、異常なる力を持った童子、鬼としての性格については、小松和彦の「怪物退治と異類婚姻——『御伽草子』の構造分析——」(『日本文学』一九七七年二月号所収)に詳しい。御伽草子の異類婚姻や異常児性の濃度をみると、東洋本より大英博本の方が表現内容が少し稀薄であり、また物語の完成度の高い大英博本の特色を見ると、大英博本の成立が後に来る可能性が高い。

いづれにしろ、大英博本「伊吹童子」絵巻は、酒吞童子絵巻の一つとして、重要な位置を占める作品である。

注

(1) 小澤弘「役の行者絵巻」について——都幾川村武藤家本と京都中野家本——『立正大学北埼玉地域研究センター年報』第十二号所収、一九八九年。

山口桂三郎・小澤弘「武蔵国比企郡の多武峯慈眼坊と武藤家」『立正大学北埼玉地域研究センター年報』第十三号所収、一九九〇年。

小澤弘「北埼玉地域の宗教絵画」『立正大学北埼玉地域研究センター年報』第十四号所収、一九九一年。

小澤弘「大英博物館所蔵「ゑんの行者」絵巻について」『調布日本文化』第四号所収、一九九四年。

(2) 『秘蔵日本美術大観』2——大英博物館Ⅱ——所収、一九九二年、講談社。二四〇～二四一頁に、榊原悟の図版解説がある。以下、全文引用した。また一七二～一七五頁に、画のみモノクロ図版で全部掲載されている。

榊原解説によれば、大英博本の制作年代は、皴法から狩野探幽を通過した以降でなければ見ることのできない特色があるとし、探幽以後、狩野常信(一八三六～一七二三)あたりと同時代——すなわち十七世紀末期から十八世紀最初期を想定できるのではないか、としている。私も、画の描法や画題内容、金泥画詞書料紙下絵や詞書の書法の他作品などから、ほぼ榊原

説に近く、一七世紀後半から末期辺りの制作かと考える。

また榊原は、大英博本は題簽もなく、内題もないので、その命名について「酒吞童子」絵巻の諸作品との内容や図様の比較ら、あえて「酒吞童子」と呼ばず、「伊吹童子」と命名したとする。この点、同系の東洋大学本の「伊吹童子」絵巻の存在を置いて、この命名は分類上適切なものである。しかし、「伊吹山と大江山という、二つの系統の「酒吞童子」が活躍した主要舞台二つを矛盾することなく結びつけた」作品という指摘は、どうであろうか。この絵巻の構成の分析とその成立背景をもう少し丹念に見る必要がある、むしろ「酒吞童子」の前章譚とその父伊吹の弥三郎の物語という別の系統の御伽草子と考えた方がよい。

(3) 『新日本古典文学大系』五四―室町時代物語 上―、一八七―二三頁、一九八九年、岩波書店。

(4) 『新日本古典文学大系』は、翻案と翻字を兼ねている編集方針のため、原本が平仮名であっても翻案のため漢字に直し、原本の平仮名部分を振りがなとして付したり、また読者の便をはかるため濁点を振ったりしている。大英博物館本の成立時点の平仮名表記を知る上でも、原本に出来る限り忠実な翻刻が必要と本稿では考えた。それは、御伽草子絵巻の比較研究する立場をとる私にとって必要な研究課程の一つであり、また詞書全文の写真版掲載がない限り、諸本の比較検討のためにも必要であると考えたからに他ならない。

(5) 奈良絵本国際研究会編『在外奈良絵本』二〇―二二頁、一九八一年、角川書店。

(6) 同右、二二頁。

(7) 同右、二二―二三頁。

(8) 奥平英雄編『御伽草子絵巻』一九八二年、角川書店。

(9) 同右、四二―四五・六二―六三頁。

(10) 「アンダーソンとモリソン―日本絵画コレクションの功労者」『秘蔵日本美術大観』二―大英博物館Ⅱ―十四―十五頁。

(11) 平凡社、一九七七年。

末筆ながら、大英博物館における本絵巻の調査・研究に際し、その調査を快く許され、また翻刻および写真版掲載を許された大英博物館およびティモシー・クラーク氏に深く感謝する。また沢井耐三・榊原悟氏には、種々ご教示を得た、記して感謝する。



図1 獣を生で食べる伊吹の弥三郎
(上巻画2 British Museum ADD176 画2)

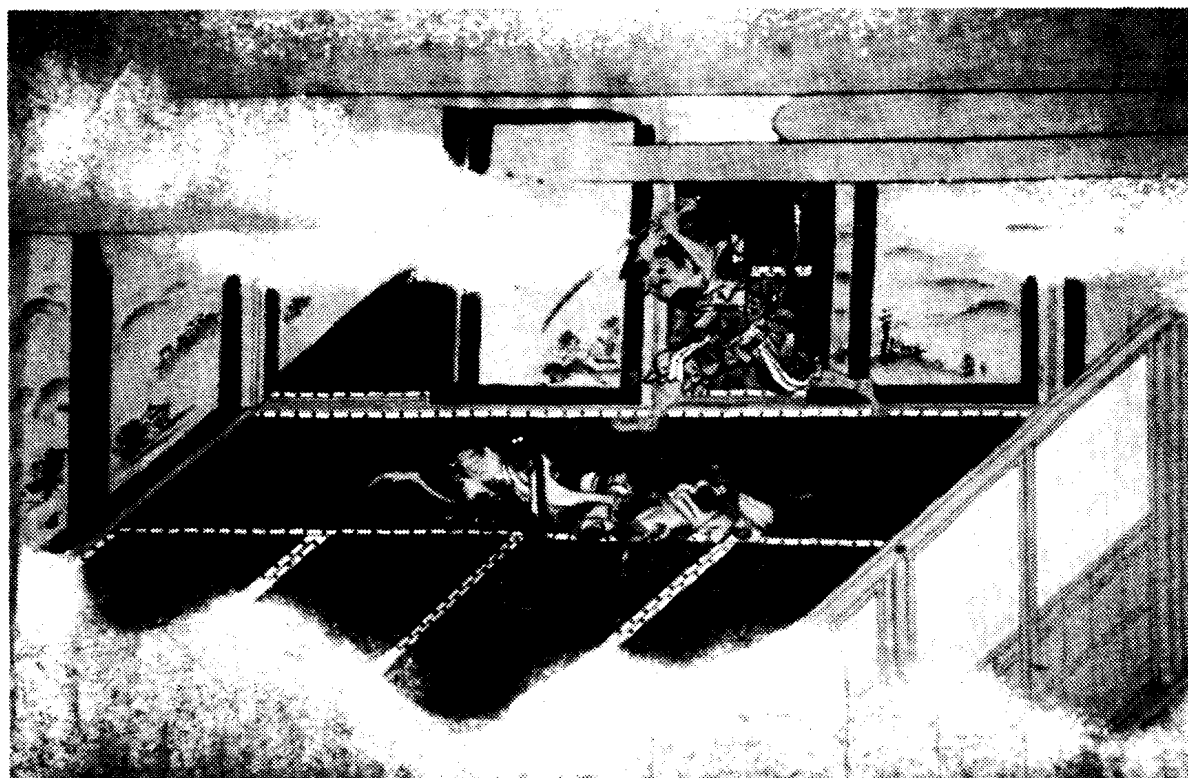


図2 伊吹の弥三郎を刺す大野木殿
(上巻画4 British Museum ADD176 画4)

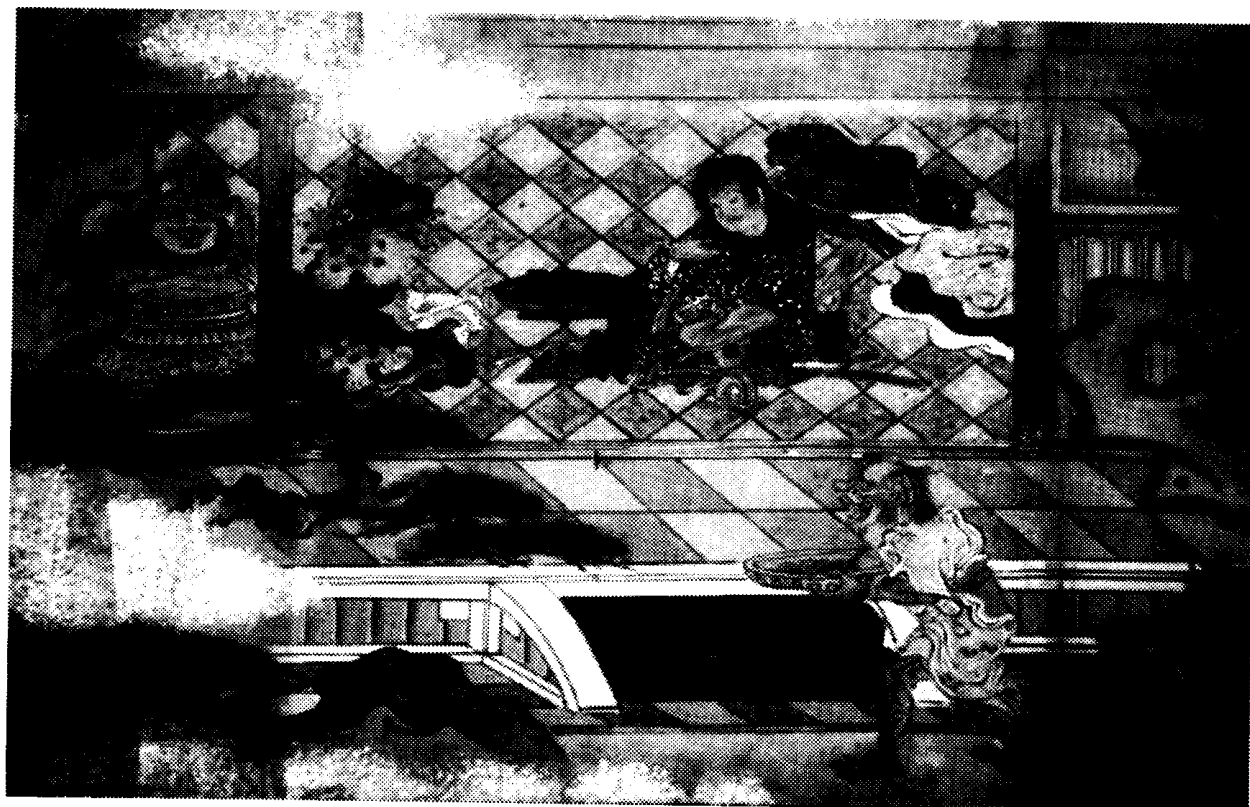


図3 酒を飲み鳥獣の肉を食らう酒呑童子
(下巻画1 British Museum ADD174 画2)



図4 最澄の比叡伽藍建立を妨げようと数十圓の杉の木と化した
酒呑童子 (下巻画2 British Museum ADD174 画3)

大英博物館所蔵「伊吹童子」絵巻 (ADD. 174/175/176) の順序付けをした翻刻文・画題と翻案

翻刻文

上巻・詞書1 [ADD. 176 詞書1]

むかしあふみの国にいふきの弥三郎と申
てゆゝしき人ありけり其ちハ弥太
郎殿と申ていにしへより代々このいふき山
のあるしにてそ侍ける又おなしき国に
おほの木殿と申て名たかき人侍りけり
そのひとさいあいのひめきミをもち

たまふミめかたち

うつくしくおハしけれハ

すなハちこのひめきミを

むかへて弥三郎殿の

つまとさためて

ひよくのかたらひを

なしたまへり

上巻・画1 [ADD. 176 画1] 「伊吹の弥三郎と大野木殿の姫君の婚姻」

上巻・詞書2 [ADD. 176 詞書2]

此弥三郎と申ハみめかたちきよやかに
きりやうことからいかめしくおハし

翻案

昔、近江国に伊吹の弥三郎と申し
て、ゆゆしき人ありけり。その父は、弥太
郎殿と申して、古より代々この伊吹山
の主にてぞ侍りける。また、同じき国に
大野木殿と申して名高き人侍りけり。

その人、最愛の姫君を持ち

給ふ。見目形

美しく御座しければ、

即ち、この姫君を

迎へて弥三郎殿の

妻と定めて、

比翼の語らひを

なしたまへり。

この弥三郎と申すは、見目形清やかに
器量事柄厳めしく御座し

けるがおさなき時より酒をこのミて
 おほくのミ給へりおとなしくなり侍る
 にしたかつて次第におほくのミける
 けるほどにつねにさけニのミよひた
 りて心きやうらんしそゞろなる事を
 のミいひちらし又ハおそろしき事
 ともをそし給へりけるあはれわか腹に
 あくほと酒をのまばやなんどねがひ事
 にもせられけるかちかきあたりハほく
 六だうへおりのほりする道路なれ
 はあき人のもてかよひける酒なとを
 ハぜひなくうばひとりてのまれけり
 又へいせいのさかなにハし、さるう
 さきたぬきなどのたぐひを其まゝ
 なからひきさき／＼食せられしか*
 ハ毎日三四つのけだものころされし
 ほとに後にハ山林をかりもとめて
 もつや／＼鳥けた物なかりけりかゝ
 りしかハ人民の家／＼にやしなひか
 ふ所の馬うしをうばひとりてくハ
 れけりおそろしき有さまなりむか

けるが、幼き時より酒を好みて
 多く飲み給へり。大人しくなり侍る
 に従つて、次第に多く飲みける。
 けるほどに、常に酒に飲み酔ひ浸
 りて、心狂乱し、漫ろなる事を
 のみ言ひ散らし、または恐ろしき事
 どもをぞし給へりける。哀れ、我が腹に
 飽くほど酒を飲まばやなんと、願ひ事
 にもせられけるが、近き辺りは、北
 陸道へ下り上りする道路なれ
 ば、商人の持て通ひける酒などを
 ば是非なく奪ひ取りて、飲まれけり。
 また、平生の肴には、猪・猿・兎
 ・狸などの類を、そのまま
 ながら引き裂き引き裂き食せられしか
 ば、毎日三、四つの獣殺されし
 ほどに、後には山林を狩り求めて
 も、つやつや鳥獣なかりけり。かか
 りしかば、人民の家々に養ひ飼
 ふ所の馬・牛を奪ひ取りて食は
 れけり。恐ろしき有様なり。昔、

いつもの国ひの川かミと申所に
やまたのおろちといふ大蛇ありし
か此おろちまいにちいけにゑとて
いきたる人をくひける也また酒を
のむ事おひたゝしやしほりの酒を
八のさかふねにのミしほとにの
ミよひてそさのおのみことに

ころされ侍りきそのおろちへん
して又神となるいまの伊吹大明神
これなりされハ此弥三郎ハ伊ふき
大明神の御やまをつかさとるひと
なれハさけをすきいきものをこの
ミ給ふかやと諸人おそれをなして
旅人も*

道をゆきかよハす

むら／＼里／＼

あれはてたり

上巻・画2〔ADD. 176 画2〕「弥三郎邸に持ち込まれると鳥獸と、それを切り生肉を食べる弥三郎」

上巻・詞書3〔ADD. 176 詞書3〕

さるほとにおほの木殿ハこのよし
をきこしめしおほきにおとろき給ひ

出雲国簸川上と申す所に、

八岐大蛇と云ふ大蛇ありし

が、この大蛇、毎日生け贄とて

生きたる人を食ひけるなり。また酒を

飲む事夥し。八塩折之酒を

八つの酒糟に飲みしほどに、飲

み酔ひて、素戔鳴尊に

殺され侍りき。その大蛇変

じて、また神となる。今の伊吹大明神、

これなり。されば、この弥三郎は、伊吹

大明神の御山を司る人

なれば、酒を好き、生き物を好

み給ふかやと、諸人恐れをなして、

旅人も

道を行き通はず、

村々里々

荒れ果てたり。

さるほどに、大野木殿は、この由
を聞こし召し、大きに驚き給ひ、

いかさまは人間にてハ有へからず
 鬼のたぐひなるへしかれもし年をへ
 てハ通力もいできつゝ人倫をほろぼ
 し世のわざハひをなしつべしいかに
 もしてこれを害せばやとおほして
 ひそかにハかりことをめくらし弥三郎を
 よび給ふ處に世のつねのありさまな
 らぬことをはちて参らすさらばとて
 おほの木殿いろ／＼のざつしやう
 をこしらへいふき殿へたち入給へり弥
 三郎すなハち出あひたいめんし色^{*}
 くのちんぶつをとゝのへさま／＼に
 もてなし侍けり其時おほの木殿御も
 たせの酒を出されたり弥三郎おほき
 によりこひて日比のしまうなれハ
 さしうけ／＼おほくのミけるほどにお
 ほの木殿のよういせられし酒馬に七
 駄とやらん侍しをこと／＼くのミつ
 くしけるとぞ聞えし

「いかさま、これは人間にては有るべからず。
 鬼の類なるべし。彼、もし年を経
 ては通力も出で来つゝ、人倫を滅ぼ
 し、世の禍をなしつべし。いかに
 もして、これを害せばや」と思して、
 密かに謀を廻らし、弥三郎を
 呼び給ふ處に、世の常の有様な
 らぬ事を恥ぢて参らず。さらばとて、
 大野木殿、色々の雜餉
 を拵え、伊吹殿へ立ち入り給へり。弥
 三郎、即ち出、相對面し、色
 色の珍物を調べ、様々に
 もてなし侍りけり。その時、大野木殿御持
 たせの酒を出されたり。弥三郎、大き
 に喜びて、日頃の所望なれば、
 差し受け差し受け、多く飲みけるほどに、大
 野木殿の用意せされし酒、馬に七
 駄とやらん侍りしを、悉く飲み尽
 くしけるとぞ聞えし。

上巻・画3 [ADD. 176画3]「大野木殿をもてなす弥三郎と、饗応の料理をつくる庖丁人。奥座敷には弥三郎の妻
 (大野木殿の姫君)」

上巻・詞書4 [ADD. 176 詞書4]

さしも大上戸なりしかともかくお
ひたゝしき事なれハ正躰もな

くのミよひあともまくらもわきま

へすそのまゝさしきにたふれふし

たりうんのきハめこそむさむなれおほ

の木殿ハたばかりおほせたりといさみ

よろこひつゝやかてかのふしたる枕に立

よりわきのしたに

かたなをつきたてあなたへ

とをれとさしこみて

わかたちこそ

かへられける

上巻・画4 [ADD. 176 画4]「七駄の酒に酔い臥した弥三郎を刺す大野木殿」

上巻・詞書5 [ADD. 176 詞書5]

ひめ君ハおやこの御中なれどもかや

うのことをハゆめくしり給ハねは

弥三郎殿ハいつもの酒によひふし

たまへるとおもひてきぬひきかげ

をかれたり三日すきしかハ酒のよひさ

めつゝおきあがりてわきのしたに刀のつ

さしも大上戸なりしが、ともかく夥
しき事なれば、正体もな

く飲み酔ひ、足処も枕も弁

へず、そのまま座敷に倒れ臥し

たり。運の極めこそ無惨なれ。大

野木殿は、謀り果せたりと、勇み

喜びつつ、やがて臥したる枕に立ち

寄り、腋の下に

刀を突き立て、彼方へ

通れと差し込みて、

我が館にぞ

帰られける。

姫君は、親子の御中なれども、かや

うの事をば努々知り給はねば、

弥三郎殿はいつもの酒に酔ひ臥し

給へると思ひて、衣引き被け

置かれたり。三日過ぎしかば、酒の酔ひ醒

めつつ起き上がりて、腋の下に刀の突

き立て有しをさぐり大におとろき
 さてハおほの木にたはかられけるこそ
 くちおしけれとておとりあかりく
 せられしが大事の所をつかれ侍る
 ゆへに心もきえくとなりてつるに
 むなしくなりにつり弥三郎殿はてた
 まひけるよし聞えしかハ野人村老も
 あんどして在る所くもはんじやうし
 けりさてもひめ君ハ弥三郎殿にわかれ
 給てなけき給ふ事かきりなし是ハひ
 とへにおほの木殿の御しわさなるへし
 なさけなの御事やとうらみ給へと*

おりふしくわいにんの月日みち

てたいらかにさんのひもととき

たまへりことにうつくし

くけたかき男子にて

おハせしかハ

「父のわすれかたみに

みるへしとよろこひて

いつきかしつき

き立て有りしを探り、大きに驚き、
 「さては、大野木に謀られけるこそ
 口惜しけれ」とて、躍り上がり躍り上がり
 せられしが、大事の所を突かれ侍る
 故に、心も消え消えとなりて、遂に
 空しくなりにつり。弥三郎殿果て給
 ひける由聞こえしかば、野人村老も
 安堵して、在る所々も繁盛し
 けり。さても姫君は、弥三郎殿に別れ
 給ひて、嘆き給ふ事限りなし。「これは、単
 に大野木殿の御仕業なるべし。
 情けなの御事や」と、恨み給へど
 も、為ん方なくして過ぎし給ふほどに、

折節、懐妊の月日満ち

て、平らかに産の紐を解き

給へり。殊に美し

く、気高き男子にて

御座せしかば、

「父の忘れ形見に

見るべし」と喜びて、

斎き傳き

たまふほとに

いつしか

弥三郎によくに

たまへりと

人々申

あへり

上巻・画5〔ADD. 176画5〕「弥三郎の忘れ形身の幼き子を慈しむ弥三郎の妻」

中巻・詞書1〔ADD. 175詞書1〕

おほの木殿このよしをきこしめしちゝ
のかたミとてもてなし給ふことハことハ
りなれとも弥三郎によくに候ハゝさ
ためてあくぎやうをなし侍るへし

おとなしくなり侍らぬさきに

かにもはからひ給へと申つかハし給へ

は姫君このよしきこしめしおほの木

殿ハわらハが父にておハしませともじや

けんの人にておハしましけり弥三郎殿

をたばかり給ふさへあさましくうらめ

しく忘るゝひまもなかりしにきのふけふ

むまれ出てたま／＼おやこのよろこひ

給ふほどに、

いつしか

弥三郎によく似

給へりと、

人々申し

合へり。

大野木殿、この由を聞こし召し、「父
の形見とてもてなし給ふ事は、理
なれども、弥三郎によく似候はば、定
めて悪行をなし侍るべし。

大人しくなり侍らぬ先に、い

かにも計らひ給へ」と、申し遣はし給へ

ば、姫君、この由聞こし召し、「大野木

殿は妾が父にて御座しませども、邪

険の人にて御座しましけり。弥三郎殿

を謀り給ふさへ、浅ましく恨め

しく、忘るる隙もなかりしに、昨日、今日

生まれい出て、偶々、親子の喜び

をなし日比のかなしさをもなくさめ
はやとおもへはかさねてうきめ見
せむとてかやうにのたまふかやと
からきことにうらみかこちたまへハを
むあいの中になしさハ誰もさこ*

そあれとあはれにおほし

つゝそのうちハまたのたまひ

つかハす事もなしかくて此ちこ

月日かさなるまゝにいつしか

せいじんし給へり父に

よくにて酒をよく

のミ侍しかハみな人酒

呑童子とぞ申

ける

中巻・画1〔ADD. 175 画1〕「幼き時より父によく似て酒を好む弥三郎の子（浦呑童子）」
中巻・詞書2〔ADD. 175 詞書2〕

つねに酒によひて心みたれたましる

こはくてとがもなき人をさいなミの

やまをはしりありきてむまうし

をうちたゝきなどおさなき身に

おうぜぬあくぎやうをのミことゝ

をなし、日頃の悲しさをも慰め
ばやと思へば、重ねて憂き目見
せむとて、かやうに曰ふかや」と、
辛き事に恨み託ち給へば、「恩
愛の中に愛しさは、誰もさこ

そあれ」と、哀れに思し

つつ、その後は、また曰ひ

遣はす事もなし。かくて、この稚児

月日重なるまゝに、いつしか

成人し給へり。父に

よく似て、酒をよく

飲み侍りしかば、皆人、酒

呑童子とぞ申し

ける。

常に酒に酔ひて、心乱れ、魂

強くて、咎もなき人を苛み、野

山を走り歩きて、馬・牛

を打ち叩きなど、幼き身に

応ぜぬ悪行をのみ事と

しけれハあたりのものこれを見
てされバこそ

弥三郎殿のふん

しんよこんど

こそ世の人

たねハつくし

たまふへけれとそ

申ける

中巻・画2〔ADD.175画2〕「常に酒に酔い近隣の人々や牛馬を虐げる酒呑童子」

中巻・詞書3〔ADD.175詞書3〕

おほのき殿このよしきこしめしひ

め君のかたへつかひをたてゝ何とて申

ことをもちる給はぬぞたゝいまに世

のわさはひを引出し給ふへしとおほ

きにせめいさめ給へハ父のおほせももだし

がたし其うへあたりのものともゝおそれか

なしめばわか手にかゝへをく事ハあしかる

へしとて日吉の山の北の谷にそすてられ

けるその時どうじハ七さいにてそ侍ける

かやうにしたしむへき人々にもにくまれつ

きしたかへるたミ百しやうにもうとま

しければ、辺りの者、これを見
て、「さればこそ

弥三郎殿の分

身よ。今度

こそ世の人

種は尽くし

給ふべけれ」とぞ

申しける。

大野木殿、この由聞こし召し、姫

君の方へ使を立てて、「何とて申す

事を用る給はぬぞ。只今に世

の禍を引き出し給ふべし」と、大

きに責め諫め給へば、「父の仰せも黙し

がたし。その上、辺りの者どもも、恐れ悲

しめば、我が手に抱へ置く事は悪しかる

べし」とて、日吉の山の北の谷にぞ捨てられ

ける。その時、童子は七歳にてぞ侍りける。

かやうに親しむべき人々にも憎まれ、付

き従へる民百姓にも疎ま

れてそこもしらぬ深谷にすみ侍れ
 ハこらうやかんにがいせられて露のい
 のちたち所にきえぬへしとこそ思ひ
 しにあへておとろふるけしきもなく
 かなしめる有さまもなし日をへ月を
 わたりてたくましくなりゆくほどに
 日比のかたちにハかはりておそろしく
 すさましきていなり

へいぜいハ木のミなどをとりて

食しけるか後にハてうるい

ちくるいなとをぶくし

けるとそきこえし

中巻・画3〔ADD. 175 画3〕「日吉の北の谷へ放逐され、鳥獸を食らい遅しく生きる酒吞童子」
 中巻・詞書4〔ADD. 175 詞書4〕

其のちをびえのミねにうつりてしは
 らくあひすミけり此所にハ二の宮ごん
 けんあまくたりおハしまして悪鬼邪
 神をいましめ給ふゆへに又其みねをも
 にけ出にけりことに此二のミヤ権現と
 申奉るハ此日本国の地主にてそおハし
 ましけるむかし天照太神あまのいわ戸

れて、底とも知らぬ深谷に住み侍れ
 ば、虎狼、野干に害せられて、露の命
 立ち所に消えぬべしとこそ思ひ
 しに、敢へて衰ふる気色もなく、
 悲しめる有様もなし。日を経、月を
 航りて、遅しくなりゆくほどに、
 日頃の形には変はりて、恐ろしく
 凄まじき体なり。

平生は、木の実などを採りて

食しけるが、後には鳥類・

畜類などを服し

けるとぞ聞こえし。

その後、小比叡の峰に移りて、暫
 く相住みけり。この所には、二宮権
 現、天下り御座しまして、悪鬼邪
 神を戒め給ふ故に、またその峰をも
 逃げ出にけり。殊に、この二宮権現と
 申し奉るは、この日本国の地主にてぞ御座し
 ましける。昔、天照太神、天の岩戸

をおしひらきあまのとはこをもつてあ
をうなハラをかきさぐり給ひし時ほこ*
にあたる物あるを何そととひたまへハ
我ハ是日本の地主なりとこたへたまひ
し国常立のみことにおハします

本地を申せは東方じやうまるり

せかいのあるしやくしによ

らいなり人じゆ二万ざいのほ

しめよりこの所の主たりと釋尊

にかたらせたまひしなり

中巻・画4 [ADD. 175 画4]「鬼神に鳥獸を貢がせる酒吞童子」

中巻・詞書5 [ADD. 175 詞書5]

ひえの山のひかしにつゝきてがゝと

してけハしきみねありこのところ

よきすミかなりとていわやなとをつ

くりてすミ侍りけりじんへんつう

りきなどをもえたりとみえていつ

くよりめしてきたりけんさまく

におそろしきけんぞくなどを

つかひけりしかるに此所ハ金石と

申てしやうぐの霊地なれハ

を押し開き、天の瓊矛をもつて青
海原を搔き探り給ひし時、矛

に当たるあるを、「何ぞ」と問ひ給へば、

「我はこれ、日本の地主なり」と答え給ひ

し、国常立尊に御座します。

本地を申せば、東方淨瑠璃

世界の主、薬師如

来なり。「人寿二万歳の初

めより、この所の主たり」と、釈尊

に語らせ給ひしなり。

比叡山の東に続き、峨々と

して険しき峰あり。この所

良き住処なりとて、岩屋などを造

りて住み侍りけり。神変通

力などをも得たりとみえて、いづ

くより召して来たりけん様々

に恐ろしき眷属などを

使ひけり。しかるに、この所は金石と

申して、清浄の霊地なれば、

太神の御子たちあまくたらせ給て

跡をたれ給ふまうりやうき

じんハけがらハしいでよ／＼と

さいなミ給ふゆへに其所をハ

にけさりけり八王子

と申所これなり

太神の御子たち天下らせ給ひて、

跡を垂れ給ふ。「魍魎、鬼

神は汚らわしい、出でよ、出でよ」と

苛み給ふ故に、その所をば

逃げ去りけり。八王子

と申す所、これなり。

中巻・画5〔ADD. 175画5〕「石屋で酒を飲む酒吞童子」

下巻・詞書1〔ADD. 174詞書2〕

酒吞どうしハそれよりも大ひえにそ

うつりける此所ハむかしくるそん佛の

御時まん／＼たる大海のうへに一切衆生

悉有仏性如来常住無有變易とと

なふる浪のこゑあり釋尊この浪のとゝまる

ゆくすゑを見たまへハ一葉のあしの葉に

こりかたまつて嶋となるはしとのと申

所これなり釋尊この所に仏法をひろ

めけつかいの地となすへしとのたまへは

やくし如来ハ我ハ此山の王となりて

後五百さいの仏法をまもるへしとけい

やくして東西へわかれ給へりやくし

酒吞童子は、それよりも、大比叡にぞ

移りける。この所は、昔、拘留孫仏の

御時、漫々たる大海の上に、「一切衆生、

悉有仏性、如来常住、無有變易」と唱

ふる浪の声あり。釈尊、この浪の留まる

行く末を見給へば、一葉の葦の葉に

凝り固まって島となる。橋殿と申す

所、これなり。釈尊、「この所に仏法を弘

め、結界の地となすべし」と曰へば、

薬師如来は、「我は、この山の王となりて

後五百歳の仏法を守るべし」と契

約して、東西に別れ給へり。薬師

如来ハはやく二の宮ごんけんとあらは
れてをびゑのたけにあま下給へは釋尊
ハまた大宮ごんけんとあらハれてやまと
の国しきのこほりにあまくなり給し*
がそれよりやがて老翁のかたちをげむ
してこの大びえにうつり給へり酒吞
どうしハおそれをなし奉りやがて大びえ
をにげ出て西坂にそうつりけるこの所
ハようがいの地なりふかき谷をきりま
ハし大木をならへ大はんしやくをきりと
をして数百丈のいわやをつくり居所
をしめてあまたの

けんぞくをしたがへ四方を

かけりありかせて人民のたから

をうはひとり山のことに

つミあけ野山をとひまはり

て鳥けたものをとり

たくハへて朝夕の食物

とぞしけるおそろし

ともいふハかりなし

如来は、早く二宮権現と顕
れて、小比叡の岳に天下り給へば、釈尊
は、また大宮権現と顕れて、大和
国磯城郡に天下り給し
が、それよりやがて老翁の形を現
じて、この大比叡に移り給へり。酒吞
童子は、恐れをなし奉り、やがて大比叡
を逃げ出でて、西坂にぞ移りける。この所
は、要害の地なり。深き谷を切り廻
し、大木を並べ、大磐石を切り通
して、数百丈の岩屋を造り、居所
を占めて、数多の

眷属を従へ、四方を

駈けり歩かせて、人民の宝

を奪ひ取り、山のごとくに

積み上げ、野山を飛び廻り

て、鳥・獣を採り

貯へて、朝夕の食物

とぞしける。恐ろし

ともいふ計りなし。

下巻・画1〔ADD. 174 画2〕「西坂へ逃れ、数百丈の岩屋で鬼神の料理する肴で酒を飲む酒吞童子」

下巻・詞書2〔ADD. 174 詞書3〕

ここにまたあふみの国しがのこほりの
住人に三津の百枝といふ人男子を一人
もたれけりこんそうめいのわらハなりし
か年十二と申せしに出家してその

名を最澄法師とかうすとし比がくもん
しゆぎやうせられしか猶もじんぐみ
めうの玉をミがゝはやおほしめし
つるに入唐して顯密の両宗ゑんて

いをきはめ奥義をつたへてきてうせら
る傳教大師と申ハこれなりその比かし
は原の御門ならの都をやましろの国
をたきのこほりにうつし給ふいまの京
平安城四神さうをうの地これなり時に
大師そうもむ申てのたまはくわうじや
うの鬼門にあたつてちんごこつかのたう
ぢやうをこんりうし国土をまもり寶
祚をいのり奉らんとみかと思いかんまし
ましてすなハち大師と御心をひとつにし
て伽藍をさうくし給ふへしとなり
大師やかて日吉の山によぢのほりい

ここにまた、近江国滋賀郡の

住人に、三津の百枝といふ人、男子を一人
持たれけり。利根聡明の童なりし
が、年十二と申せしに出家して、その

名を最澄法師と号す。年頃、学問
修行せられしが、猶も深甚微

妙の玉を磨かばやと思し召し、

遂に入唐して、顯密の両宗淵底

を究め、奥義を伝へて帰朝せら

る。伝教大師と申すは、これなり。その頃、柏

原御門（帝）、平城の都を山城国

愛宕郡に移し給ふ。今の京、

平安城、四神相応の地、これなり。時に、

大師、奏聞申して曰く。「王城

の鬼門に当たつて、鎮護国家の道

場を建立し、国土を護り、宝

祚を祈り奉らん」と。御門、叡感まし

まして、すなはち大師と御心を一つにし

て、「伽藍を創造し給ふべし」となり。

大師、やがて日吉の山に攀ち登り、何

づくかしやうぐの靈地なるへしとミ
めぐり給ふに山中に法花どくじゆ
の聲きこえしかはその所に尋ねゆ
きてみ給へハ大地のそこに此經のこゑハ
有けり此地なんがらむこんりうの地なるへし
とおほしめしさだめつしかるに酒吞ど
うじハこのよしをみてこの所になら
いできけつかいのちとならハ我この山に
すむことかなふましさらハいかにもし
てけさゝをなさはやとともにより
つうりきをえたりしかハ一夜の
ほとに数十圀のすぎの木とな
つてかのところにおひはびこれ
りあまたのそまともこれをきり
たをさむとすれともつるにそ
のこうなりがたしときに大師
十方を礼してのたまハく*
あのくたら

三ミやく三ほたいの
ほとけたち
わかたつそまに

処が清淨の靈地なるべしと見
巡り給ふに、山中に法華読誦
の聲、聞こえしかば、その所に尋ね行
来て見給へば、大地の底に、この經の聲は
有りけり。「この地なん伽藍建立の地なるべし」
と思し召し、定めつ。しかるに、酒吞童
子は、この由を見て、「この所に伽藍
出来、結界の地とならば、我はこの山に
住むこと叶ふまじ。さらば、いかにもし
て、けささ(邪魔)をなさばや」とて、本より
通力を得たりしかば、一夜の
程に、数十圀の杉の木とな
つて、かの所に生い蔓延れ
り。数多の杣ども、これを切り
倒さむとすれども、遂にそ
の功なりがたし。時に、大師、
十方を礼して曰く。

「阿耨多羅

三藐三菩提の

仏たち

我が立つ杣に

ミやうかあらせ

たまへ

と詠し給ひけれハ

此杉の木あさ日に霜の

とけしことくにきえく^と

なりてうせにけり

下巻・画2〔ADD.174画3〕「最澄の比叡伽藍建立を妨げようと杉の太木と化し、通力で杣人の切り倒しも遮る酒呑童子」

下巻・詞書3〔ADD.174詞書4〕

さてこそ其地にがらんをたてられ

て根本中堂とかうしいわうぜんぜの

ぞんさうをすへあがめ天台のけうぼうを

うつし給へり山ハこれ戒定恵の三がくを

へうして三塔をたて人ハまた一念三

千の儀をあらハして三千のしゆとをを^か*

れたり其後傳教大師をひえのだ

けに閑居して

はも山やをびえのすぎのひとりゐるは

あらしもさむしとふ人もなし

と詠し給へはこくうに日月星の三の

光あらハれあるひハしやかやくしミだの

冥加あらせ

給へ^(c)

と詠し給ひければ、

この杉の木、朝日に霜の

溶けし如くに消え消えと

なりて、失せにけり。

さてこそ、その地に伽藍を建てられ

て、根本中堂と号し、医王善逝の

尊像を据へ、崇め、天台の教法を

移し給へり。山はこれ、戒・定・慧の三学を

表して、三塔を建て、人はまた一念三

千の儀を表して、三千の衆徒を置か

れたり。その後、伝教大師、小比叡の岳

に閑居して、

「波母山や小比叡の杉の一人居は^(f)

嵐も寒し問ふ人もなし」

と詠し給へば、虚空に日・月・星の三つの

光現れ、或ひは釈迦・薬師・弥陀の

尊像とへんじあるひハ一たいとなり

しゆぐのきずいをしめし給へハ大師

この御ありさまをつらくくはんし給

つゝもとより非一非三中道実相の

妙躰なりとてこの山の御神を山王*

とそあかめ申されきみかと大師と

御心を比給ふゆへに比叡山と申なり寺を

ハ延暦寺とかうし天台大乘の法流を

末世にさかやかし寶祚長久をとこしな

へにいのり給ふまことにめてたき御事

なるへし

下巻・画3〔ADD.174画4〕「比叡の伽藍建立を成就した最澄の前に、三仏（釈迦・薬師・阿弥陀）が示現し種々の奇瑞をなす」

下巻・詞書4〔ADD.174詞書1〕

さるほとにしゆてんどうじハ三世の諸

仏にきらハれ七社のこんけんにくま

れしかはつるにこのいはやにもすむ

ことかなハすしてそれより丹波国に

にげゆき大江山といふ所に一つの巖

窟をもとめ得たりそのけしきことに

いかめしく物すごし山岳がゝとそびえた

尊像と変じ、或ひは一体となり、

種々の奇瑞を示し給へば、大師、

この御有様をつらつら覩じ給ひ

つつ、本より非一非三、中道実相の

妙体なりとて、この山の御神を、山王

とぞ崇め申されき。帝、大師と

御心を比べ給ふ故に、比叡山と申すなり。寺を

ば延暦寺と号し、天台大乘の法流を

末世に栄やかし、宝祚長久の常しな

へに祈り給ふ、真に目出度き御事

なるべし。

下巻・画3〔ADD.174画4〕「比叡の伽藍建立を成就した最澄の前に、三仏（釈迦・薬師・阿弥陀）が示現し種々

さる程に、酒吞童子は三世の諸

仏に嫌はれ、七社の権現に憎ま

れしかば、遂にこの岩屋にも住む

こと叶はずして、それより丹波国に

逃げ行き、大江山といふ所に、一つの巖

窟を求め得たり。その気色、殊に

厳めしく物凄し。山岳峨々と聳えた

れハ鳥もかけりがたし谷ふかくめぐり／＼
てかよふへき道もなきせつしよなるに
いはほをうがち石をたゝミて石壁をな
し石門をたてゝけむぞくのおにとも
を日夜けいごにすへをきたりその
おくにひろ／＼といわやをつくりてしゆ
てんとうしあひすめりしよはうにとび
めぐりて七ちん万ほうをはこひとり美
人貴女をたふらかしきたりてふじん
くハんぢよのことくに*

めしたかへゑいぐわに

ほこりけらくをきはむる

よそほひぜんたいミものの

ふしぎなり世にこれをお

にがしやうと申とかや

下巻・画4〔ADD. 174画1〕「丹波国大江山へ逃れて大岩屋を構え、美女を側に侍らせ鬼神を従え、栄華快樂に耽る酒吞童子」

翻刻文・画題と翻案における注記

※翻刻にあたって、漢字は原則として常用漢字を用い、古体・異体・略体文字も現行字体に改めた。ただし「躰」はそのままとした。仮名文字のうち「ニ・ハ・ミ」は、そのままの字体を用いた。

れば、鳥も翔りがたし。谷深く巡り巡り
て、通うべき道もなき切所なるに、
巖を穿ち、石を畳みて石壁をな
し、石門を建てて、眷属の鬼ども
を日夜警固に据へ置きたり。その
奥に、広々と岩屋を造りて、酒
吞童子相住めり。諸方に飛び
巡りて、七珍万宝を運び取り、美
人貴女を誑かし来たりて、夫人
官女の如くに

召し従へ、栄華に

誇り、快樂を極むる

装い、前代未聞の

不思議なり。世にこれを鬼

が城と申すとかや。

※翻案においては、文意や語句の意味を明確にするため、あえて漢字語句の表現を用いた。当時の語句にできる限り近い文字を当てはめようと試みたが、誤用している可能性もあり、この点諸氏のご教示を得られればと思う。

※上段の翻刻文で、行の下に＊印を付した箇所は、その次の行との間で詞書料紙の紙継ぎがなされていることを示す。

(a) 「けるほとに」を、沢井耐三翻刻(新日本古典文学大系本)では、「多く飲みけるほどに」とし、脚注で底本(私注、大英博本)「のみけるけるほとに」としているのは、衍字と誤解したためか。「けるほとに」は、「ける程に」と翻案され、「念を押す時、重ねて言うことばの代わりにいう語」(大野晋ほか編『岩波古語辞典』四五四頁)とされ、ここでは衍字ではなく、前文の強調で原文のままでもよいと考える。

(b) 「しし」は、全般的に獣の肉を意味するが、「鹿」「猪」「獅子」などにも相当する。ここでは、詞書に対応する画の方から、翻案では一応「猪」を宛てた。他の画には「鹿」も描かれるから、必ずしも妥当ではないかもしれない。

(c) 「とほこ」は、「天の瓊矛」の「ぬほこ」かと推察されるが不詳。翻案では、「瓊矛」を宛てておく。

(d) 「けささ」は、妨げるの意で、翻案では(邪魔)と現代風の翻意を括弧して挿入した。

(e) この歌は、沢井によれば『新古今集』釈教に「比叡山の(根本)中堂建立の時」の詞書として載るといふ。またすでに佐竹昭広『酒吞童子異聞』によっても、指摘されている。

(f) この歌は、沢井によれば『風雅集』神祇に「これは日吉の地主権現の御歌となむ」として所収されているといふ。

大英博物館所蔵「伊吹童子」絵巻の法量

紙幅 31.2 cm 軸経 2.4 cm 軸長 32.8 cm (全巻ともに)

上巻 (ADD. 176)

題簽なし

<復元詞と画>

見返し	25.7 cm	(金箔地)		
詞 1	46.0 cm	料紙 01	46.0 cm	<上巻詞 1>
画 1	105.5 cm	料紙 02	52.3 cm	<上巻画 1>
		料紙 03	53.2 cm	
詞 2	115.0 cm	料紙 04	49.2 cm	<上巻詞 2>
		料紙 05	53.0 cm	
		料紙 06	12.8 cm	
画 2	101.9 cm	料紙 07	49.1 cm	<上巻画 2>
		料紙 08	52.8 cm	
詞 3	62.8 cm	料紙 09	34.9 cm	<上巻詞 3>
		料紙 10	27.9 cm	
画 3	103.8 cm	料紙 11	51.6 cm	<上巻画 3>
		料紙 12	52.2 cm	
詞 4	39.8 cm	料紙 13	39.8 cm	<上巻詞 4>
画 4	103.6 cm	料紙 14	51.2 cm	<上巻画 4>
		料紙 15	52.4 cm	
詞 5	94.3 cm	料紙 16	50.0 cm	<上巻詞 5>
		料紙 17	44.3 cm	
画 5	101.9 cm	料紙 18	51.6 cm	<上巻画 5>
		料紙 19	50.3 cm	
尾紙	27.2 cm			
全長	927.5 cm	画と詞の全長	874.6 cm	

中巻 (ADD. 175)

題簽なし

見返し	26.1 cm	(金箔地)		
詞 1	75.5 cm	料紙 01	48.4 cm	<中巻詞 1>
		料紙 02	27.1 cm	
画 1	103.1 cm	料紙 03	50.8 cm	<中巻画 1>
		料紙 04	52.3 cm	
詞 2	44.7 cm	料紙 05	44.7 cm	<中巻詞 2>
画 2	104.9 cm	料紙 06	52.0 cm	<中巻画 2>
		料紙 07	52.9 cm	
詞 3	72.6 cm	料紙 08	51.1 cm	<中巻詞 3>
		料紙 09	21.5 cm	

大英博物館所蔵「伊吹童子」絵巻について

画 3	102.9 cm	料紙 10	51.2 cm	< 中巻画 3 >
		料紙 11	51.7 cm	
詞 4	53.4 cm	料紙 12	26.7 cm	< 中巻詞 4 >
		料紙 13	26.7 cm	
画 4	104.2 cm	料紙 14	52.0 cm	< 中巻画 4 >
		料紙 15	52.2 cm	
詞 5	49.7 cm	料紙 16	49.7 cm	< 中巻詞 5 >
画 5	100.4 cm	料紙 17	49.0 cm	< 中巻画 5 >
		料紙 18	51.8 cm	
尾紙	19.8 cm			
全長	857.3 cm	画と詞の全長	811.4 cm	
下巻 (ADD. 174)				
題簽なし				
見返し	25.0 cm	(金箔地)		
詞 1	68.9 cm	料紙 01	50.0 cm	< 下巻詞 4 > *
		料紙 02	18.9 cm	
画 1	156.8 cm	料紙 03	51.9 cm	< 下巻画 4 > *
		料紙 04	52.7 cm	
		料紙 05	52.2 cm	
詞 2	97.5 cm	料紙 06	46.1 cm	< 下巻詞 1 >
		料紙 07	51.4 cm	
画 2	103.6 cm	料紙 08	51.5 cm	< 下巻画 1 >
		料紙 09	52.1 cm	
詞 3	131.3 cm	料紙 10	48.4 cm	< 下巻詞 2 >
		料紙 11	52.7 cm	
		料紙 12	30.2 cm	
画 3	104.5 cm	料紙 13	52.4 cm	< 下巻画 2 >
		料紙 14	52.1 cm	
詞 4	66.5 cm	料紙 15	17.4 cm	< 下巻詞 3 >
		料紙 16	49.1 cm	
画 4	104.3 cm	料紙 17	51.8 cm	< 下巻画 3 >
		料紙 18	52.5 cm	
尾紙	30.0 cm			
全長	888.4 cm	画と詞の全長	833.4 cm	